

第三回

大島輝久の會

令和六年十二月一日
宝生能楽堂



<https://www.noh-oshima.com/>
osimano@orange.ocn.ne.jp

主催 有限会社 檜木端

撮影 中村 治 装丁/デザイン 堀 貴之 題字 村宮 ゆみこ

ご挨拶

本日は第三回「大島輝久の會」に御来場賜り、誠にありがとうございます。

私共喜多流の本拠地である目黒の喜多能楽堂が未だ改修工事のため、今回は宝生能楽堂にて公演を行なわせていただく事となりました。

私は二十代の前半、貪るように他流の舞台を拝見している時期がありました。今でも鮮明に脳裏に焼きついている素晴らしい舞台の多くが、ここ宝生能楽堂で行われていました。

その当時、まさか自分が将来この舞台上で演能会を催す事になろうとは夢にも思っていませんでした。

本日上演します能「安宅」、演じる側の難しさは何といっても誰もがよく知る弁慶を直面で演じる事にあると思います。

本日まで来場の皆様の頭の中にはそれぞれの明確な弁慶像があるはずで、そのイメージの中に違和感なく自分自身を置く事が出来るのか…、考えただけでも恐ろしいのですが、これまでに師から受けた教えと、共に関所を越えてくれる仲間を信じ、精一杯勤めさせていただきます。

最後になりましたが本日まで出演頂く諸先生方、ご来場賜りました皆様に重ねて心より御礼を申し上げます。

大島輝久

第三回 大島輝久の會 番組

午後二時開演（午後一時二十分開場）

仕舞

八島

大島伊織

地謡

塩津圭介
佐々木多門

吉野静

大島衣恵

大島政允

大島輝久

舞囃子

熊坂

香川靖嗣

大鼓 原岡一之
小鼓 飯田清一
太鼓 小寺真佐人
笛 竹市 学

地謡

金子龍晟 内田成信
栗谷充雄 狩野了一
栗谷浩之 金子敬一郎

狂言

柑子

シテ 山本東次郎

アド 山本則孝

休憩（二十分）

能

安宅

シテ 大島輝久

ワキ 宝生常三

大鼓 亀井広忠
小鼓 飯田清一
笛 竹市 学

問狂言

山本則秀
山本則重

後見

塩津哲生

中村邦生
狩野了一

地謡

栗谷浩之 栗谷明生
内田成信 大村 定
金子敬一郎 出雲 康雅
栗谷充雄 長島 茂

終了予定 午後五時頃

・能 安宅（あたか）

源義経は平家を滅ぼすのに大へん功績があったにもかかわらず、諺言によつて兄の頼朝に疎まれ、ついには都を落ちて奥州平泉に向かう。能の《安宅》は、山伏姿に変装した義経一行が弁慶の知略を以て安宅の関を突破するという話。単純なストーリーだが、関所での山伏たちの勤行、弁慶が読み上げる勧進帳、義経の折檻、富樫と山伏たちの睨み合い、さらに、関を通過した後の主従の心の通い合い、力強い「男舞」、そして危機を脱する結末まで、間然するところなしの名作である。

基本的には『義経記』等にある義経の物語をふまえるが、そのままだけではない。同書では、義経を弁慶がとっさの機転で折檻するのは安宅の関ではなく、「如意の渡」という渡し場のこと。「山伏は舟に乗せない」と乗船を拒否した渡し守との応酬の中での出来事である。

また、弁慶が偽りの勧進帳を読む話は幸若舞の「富樫」にあるが、それは富樫の館のこと。能との先後関係も不明である。義経の北国落ちの途中、いろいろな場所でのエピソードを、安宅の関でのこととして一つにまとめ、緊迫したドラマを創りあげたのは、能作者の手柄と言えるだろう。なお、従来作者とされていた観世小次郎信光は、『安宅』の上演記録初出の一四六五年には15歳以下であることが判明しており、本曲の作者である可能性は限りなく低い。

中世には、葛城や熊野といった都近くの山だけでなく白山・羽黒山・彦山など地方の山でも修験道が盛んで、山伏の往来が多く、山伏姿で旅するのは妙案だった。しかも弁慶は、自分たちを「東

・狂言 柑子（こうじ）

一つの枝に実が三つなっているという珍しい「三つ生りの柑子（みかん）」をめぐるお話。主人は前夜「さる方」で持てなされて大酒を飲み、土産にもらった三つ生りの柑子を太郎冠者に預けた。翌日太郎冠者を呼び出し、「大酒に酔って土産をおまに預けたものは何だったか？あれを出せ」と言うが、太郎冠者は自分ももらったのだと思い、全部食べてしまっていた。もちろん、それをストリートに詫げるような太郎冠者ではない。さて、どうするか。彼はなかなか物知りで、「好事門を出でず、悪事千里を行く」という諺もバツと口から出る。また、平相国（平清盛。六波羅に邸宅があった）を滅ぼそうとした陰謀が露見して硫黄が島に流された三人のうち、平判官康頼・丹波の少将成経には赦免状が届き、俊寛だけが許されず島に一人残されるという有名な悲話もよく知っていて、これを三つ生りの柑子に喩えたりもする。

何だかんだと理由を付け、ただ柑子を食べたというだけのことを面白おかしく語る太郎冠者の話の巧さや楽しさ……。それはそのまま、演者の芸の力だとも言えよう。

大寺再建のため諸国を勧進して（寄付を勧めて）まわる山伏」と偽っている。東大寺は平重衡による「南都焼き討ち」で大仏殿を含む主要な建築物を失い、戦後に東大寺勧進職についた俊乗房重源が、諸国に寄付を集める山伏を多数派遣していたのだ（ちなみに、この勧進の趣意書が「勧進帳」である）。ただし義経だけは山伏に見えないため、一番身分の低い強力に変装させ、笠で高貴な顔を隠し、笈を背負わせ後ろを歩かせて見破られないように工夫を施したうえで、富樫と対峙する。

当然ながら、富樫は通してはくれない。問答無用で山伏は斬ると言われた一行は、最期の勤行を始める。殊勝に死のうとしているのではない。勤行にかこつけて、山伏がどんなに尊く、それを傷つけたらどんな恐ろしい罰が待っているか、脅すのだ。謡の内容は難しい言葉が並び聞き取りにくいのが、弁慶を頂点とする陣形で山伏たちが次々に座る際の動きや、全員が数珠を揉む迫力は、本曲の大きな見どころの一つである。

富樫は脅えたのか少しは信じたのか判らないが、すぐに斬り捨てはせず、本当に東大寺再建の山伏なら勧進帳を読めという。そんなものはないので、弁慶は適当な巻物を取り出し、東大寺の大仏の由緒と戦乱で焼けてしまった事情、寄付を勧める文言を、実際に書かれてあるかのように読み上げる。この「勧進帳」は、七五調ではない散文を謡のリズムに合わせて謡うのが難しく、『正尊』の「起請文」、《木曾》の「願書」と並び古くから「三読物」として重い習になっている。

勧進帳の読み上げを聞いて「関の人々肝を消し、おそれをなして通しけり」と謡曲には書かれているが、まだ疑いは残っていた

ようだ。ほっとした一行が関を抜けようとしたところ、義経が見破られてしまう。有名な打擲のシーンである。弁慶は、よろよろとして見咎められた「強力」を打擲すると同時に、富樫に向かっては、「難癖をつけるのは笈の中のものか？ほしいのか？弱い者いじめか？」と迫る。山伏全員が富樫に斬りかかろうとするのを弁慶が必死で抑えつつ、富樫に迫っていく場面は、能らしい力と力のせめぎ合いを見せてくれる。

一行は、やっと本当に関を抜けることができた。一度後見座に下がったシテがまた舞台に出てくると、舞台は関所から遠く離れた山藪のひとところになる（富樫と従者は後座に退きこの場にはいない体）。非礼を詫げる弁慶と彼の機転に感謝する義経。戦いに明け暮れた過去を振り返り現在の悲運をしみじみと嘆く様子が、地謡（クリ・サシ・クセ）によって語られる。

そこへ富樫からの酒が届く。先刻の失礼を詫げると言うのだが、弁慶は信じてはいない。「心なくれそ（心を許すな）」「怪しめらるな」と一同を諷めつつ、酒を酌み交わし舞を舞い、「虎の尾を踏み毒蛇の口を逃れたる心地」で奥州へと下っていく。こうした逃れて行った先には平泉での悲劇が待っていることを我々観客は知っている。それでも、この最後の場面を見ると今まで息を詰めて見守っていた緊張が解け、ほっと安堵して終わることとなる。

老練の弁慶も若々しい弁慶も、知恵深くも荒々しくも、これまでにさまざまなタイプの弁慶が演じられてきた。演じ方によって富樫との関係も、結末の受け止め方も変わってくるだろう。充実の年代にはいった大島輝久さんはさて、どんなリーダーを演じてみせてくれるだろうか。

能「安宅」を鑑賞する上で参考となる歴史的背景について歴史学の視点からいくつか述べてみたい。ワキ「富樫某」の名宣で、兄の源頼朝と「御仲不和」になった「判官殿」義経が「十二人の作り山伏」となり、「奥」つまり陸奥国へ下向しようとしていること、情報を得た頼朝が捕縛のため「国々に新聞」を立てたことが示される。鎌倉幕府の創設者たる鎌倉殿頼朝と平家打倒の立役者義経、血を分けた異母兄弟が「不和」となったのはなぜか。これまでさまざまな解釈がなされてきた。有力なのは義経が朝廷から官職を賜った「自由任官」である。当時、自由とは「自分勝手」を意味する語であった。つまり、義経が頼朝の推挙を受けず、勝手に左衛門尉に任官し、検非違使の宣旨も賜った（この地位を通常「判官」と呼ぶ）ことに頼朝が激怒したとする説である。

しかし、頼朝はその後も義経を伊予守に推挙し、兄弟の亡父義朝を供養する勝長寿院の落慶法要への出席を促すなど、鎌倉に呼び戻そうとした。現在の研究では、単に自由任官が問題なのではなく、義経が朝廷の最高権力者「治天の君」（天皇を誰にするかという決定権を持つ上皇Ⅱ院）たる後白河院に取り込ま

れ、在京義務のある検非違使を辞任せず、鎌倉に帰還しなかったことが決定的要因だったとみている。

また、両者には資質の違いもあった。頼朝は後白河と虚々実々の駆け引きを展開できる手腕と視野を持っていた。さらに、短期間で東国武士たちと主従関係を築き、軍事政権の頂点に君臨するため身内をも御家人に位置づける方針を打ち出した。頼朝は確固たる政権構想を持つ有能な政治家だったのである。一方、義経は武力による平家打倒が第一であった。ただ、鎌倉殿の実弟という自負が災いし、東国御家人との繋がりは希薄だった。そこで、平家追討戦では現地の武士を味方に引き入れ、少数精鋭で奇策を駆使したのである。義経は頼朝や後白河の政治的思惑とは無縁の戦術家、武勇を重んじる勝負師であった。

この資質の違いは平家滅亡に際し亀裂を生んだ。政治家の頼朝は後白河の意向を汲んで安徳天皇と三種の神器の確保を優先したのに対し、戦術家の義経は平家打倒を優先し、壇ノ浦合戦で安徳の命と宝剣を失った。頼朝にとっては許し難い失態であった。

こうしたことが積み重なって義経は京都を出奔し、二年ほど後、奥州平泉に入っていたことが判明する。平泉には頼朝挙兵前から義経をかくまっていた奥州藤原氏三代目の秀衡がいた。砂金や良馬、北国の珍しい物品などで繁栄を築いた秀衡は、

頼朝も警戒する軍事力を保持していた。義経が平泉を目指したのもうなずける。

とはいえ、義経主従の逃避行については情報が錯綜していて、不明な点が多い。鎌倉幕府の編纂物『吾妻鏡』や藤原兼実の日記『玉葉』などにより、その一端がわかるのみである。諸史料によれば、義経らは大物浜から船出したものの暴風のため難破、主従は離散した。残ったのは源有綱・堀景光・武蔵坊弁慶と静御前の四人だけだったという。

義経は吉野の僧坊に潜伏し、「山伏」に姿を変えて大峰に入山した。山伏は諸国の山岳を遍歴する仏教修行者で、験力・体力に秀でていると考えられていた。絶妙の変装といえる。静は女性のため入山できず、蔵王堂で捕えられて鎌倉に移送された。以上は静が鎌倉で尋問に答えた内容である。また、難破後に義経とはぐれた伊勢三郎義盛や佐藤忠信ら有力な従者は、京都などで誅殺もしくは自害した。能「安宅」の詞章には「伊勢の三郎」も出てくるが、すでに殺されていたのである。

その後も義経は、比叡山延暦寺や南都興福寺など畿内近国の寺院で潜伏を続けた。僧侶たち宗教関係者、とくに武力の行使も厭わない悪僧たちが逃亡を手助けしたのである。シテの「武蔵坊弁慶」も史料にその名がみえることから実在した僧侶だったと思われる。ただ、具体的な活動の記録はない。こ

したことから、「武蔵坊弁慶」は「判官殿」義経を支援した幾人もの宗教関係者・悪僧たちの象徴だったと考えられている。そして、実態が不明であるが故に、人々の願望や理想を取り込みつつ自由に造形され、主君に忠誠を尽くす才智と怪力を併せ持った超人として描かれることになったのである。

弁慶の見せ場の一つが勧進帳の読み上げである。勧進とは寺社や橋梁の造営・修復などのために寄付を募る行為である。勧進帳は募財の趣旨を記した書面で、これを読み上げ結縁を勧めて浄財を募った。シテ「弁慶」の「南都東大寺建立のため」というセリフは、治承四年（一一八〇）十二月、平家の南都攻めで焼け落ちた東大寺の復興を指す。当時は王の秩序「王法」（天皇は「王」と認識されていた）と仏の教え「仏法」が互いに支え合うことで国家安泰が実現するという考え方「王法仏法相依論」が信じられていた。聖武天皇が建立した東大寺の焼失に衝撃を受けた「治天の君」後白河は、ただちに俊定房重源を大勧進職に任じて全国から寄付を募る復興事業に着手した。頼朝も周防国を費用捻出の国に指定し、御家人たちを動員して協力した。ワキ「富樫某」が弁慶も勧進帳を所持しているはずであり、この場で聴聞したいと語るセリフにはこうした歴史的背景がある。

では、ワキの「富樫某」とはどのような人物だったのか。

富樫氏は加賀国の豪族で、系図集の『尊卑分脈』によれば、平安時代前期の伝説的武人である鎮守府將軍藤原利仁の子孫であったという。平安後期、加賀国石川郡富樫荘（現在の金沢市）を本拠とする在地武士として勢力を伸張させ、源平争乱では木曾義仲に従った。義仲の滅亡により勢力はやや減退したようであるが、史料が少ないため実態はよくわからない。ただ、『尊卑分脈』の鎌倉初期の部分には「泰家」の名がみえ、「富樫介」との傍注がある。「介」という名乗りは、国衙（国司の役所）に出仕する在庁官人系の有力武士であることを示している。

一方、義経伝説に基づき南北朝・室町期に作られた文学作品『義経記』は、「安宅の渡り、根上りの松見て」「白山に参り」「加賀の国富樫といふ所へ近づき給ふ」と記した後、「ここに富樫介と申すは、隠れなき分限の者」つまり「富樫介」は付近で知らない者のいない富裕な者で、「内々判官を待ち奉る由聞こえける」と記す。そこで、弁慶は様子を見るため単身で「富樫介」の館に乗り込み、「東大寺の勧進する山伏」である旨を述べて奉賀を勧めると、富樫や女房、家の子、若党、までもが寄付をしたというエピソードを挿入する。これらのことから、ワキ「富樫某」は「尊卑分脈」「義経記」の「富樫介」「泰家」をもとに造形された人物だったのではないかと考えられている。

南北朝期になると、富樫氏は室町幕府から加賀国の守護に任

が立てられたという叙述はない。しかも、「富樫介」は安宅から離れた自邸で弁慶に應對している。要するに、中世においては「安宅の関」も「関守」としての「富樫」も自明の存在ではなかったといえるのである。

ところが、近世に入った十七世紀末、『盛長私記』という書に「安宅の関」という記述が出てくる。「安宅の関」の初出である。ただし、『盛長私記』は頼朝の側近安達盛長の日記の体を装った偽書であり、その内容は信用できない。十八世紀前半になると、地上に関跡がないのは海中に没したからだとする「安宅の関海中説」まで登場する。その後、関は実在した、いや実在していなかったという説がともに主張されるが、明治以降の近代になると徐々に実在説が優勢となる。そして、人々の関心は安宅の関跡をどの地に比定すべきか、という点に移り、昭和十四年安宅町の安宅関址が石川県の史蹟に認定される。さらに、安宅町が新たに成立した小松市に合併されたため、安宅関址やそこに建てられた「弁慶・富樫の胸像」は、小松市の貴重な文化財として保存・顕彰され、現在に至っている。

近世に始まったこの動きは、歴史はこうあって欲しいという人々の願いやロマンを源泉にしている。その思い自体は夢のあふ豊かなものといえ、安易に否定されるべきではない。ただ、先に述べたように、中世の人々が「安宅」の「関」という語を

じられるようになる。管領斯波義將に守護職を奪われた時期もあったが、十五世紀初頭に四代將軍足利義持の近習となった庶流の満成と、嫡流の満春がそれぞれ加賀半国守護として返り咲いた。南北朝・室町期には加賀の有力武士といえば富樫というイメージが作られていた可能性が高い。

最後に、「安宅」の「関」について触れておこう。能「安宅」には、頼朝の命令によって「新関」を立て、「富樫某」が「この所をばそれがし承つて山伏を留め申し候」という表現がある。また、子方「判官殿」が「安宅の港に新聞を立てて、山伏をかたく選む」という旅人から聞いた情報を弁慶に語る箇所もある。これらの詞章から「富樫某」は義経を捕えるため「安宅」に立てられた「新関」の「関守」だったとされている。

確かに、古代の律令制で「駅」が置かれるほど、安宅の地は交通の要衝であった。しかし、鎌倉期以降の中世の史料、『吾妻鏡』『玉葉』をはじめ、文書類・記録類には「安宅の渡し・渡り・湊・港」と記した例はみられるものの、「安宅の関」という記述は出てこない。先に挙げた『義経記』でも「安宅の渡り」、子方の詞章も「安宅の港に新聞を立てて」であった。もちろん義経を捕えるための「新関」であり、いわば臨時の検問所であるから、役目が終われば撤去されて単なる「渡り」に戻ったとみなすこともできよう。しかし、『義経記』でも「安宅の渡り」に「関」

用いず、「富樫」を「関守」とみなしていなかったという事実は重い。歴史的にみれば「安宅」の「関」は実在しなかったと結論せざるを得ない。百歩譲って、一時的に新関として立てられたとしても、人々の話題に上るような特段の事件もなく、すぐに撤去されたとするのが自然である。

とすれば逆に、中世の一般的な認識の中にあつて、能「安宅」の設定は異彩を放っているといえよう。義経を助け支える宗教関係者の象徴たる弁慶をシテ、加賀の有力武士たる富樫をワキとし、通る、いや通さないという二者択一の場合である「関」を設け、資質の違う兄頼朝から敵視された悲劇の英雄義経をあえて子方に演じさせるとともに、ワキ富樫がシテ弁慶の知略を引き出すことでシテが縦横無尽の活躍をみせるという能ならではの手法により、絶大な劇的効果をあげているのである。歴史的背景の上に、こうした能作者の類まれな創意工夫を置いてみると、能「安宅」の鑑賞がより意義深いものになるのではないか。



坂井 孝一
(さかい こういち)

一九五八年東京都生まれ。東京大学文学部卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得。博士（文学）。

現在、創価大学文学部教授。著書に『曾我物語の史的研究』『源頼朝と鎌倉』（ともに吉川弘文館）、『源実朝』（講談社メチエ）、『承久の乱』（中公新書）、『源氏將軍断絶』（PHP新書）、『鎌倉殿と執権北条氏』（NHK出版新書）などがある。二〇二二年NHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』の時代考証を担当。観世流の能、葛野流の大鼓を嗜み、国立能楽堂における能・狂言の作品解説、能楽学会のシンポジウムのパネリストにも登壇。愛猫家。